

# 中近世のサンティアゴ巡礼——幾つかの事例研究——

## Pilgrimage to Santiago de Compostela in the Medieval and Early Modern Ages: Some Examples

関 哲 行  
Tetsuyuki Seki

Santiago de Compostela, the most famous holy place in medieval Spain, was devoted to Santo Jacob (Saint James the Great), who became the first martyr of the Apostles after evangelizing in Spain. Pilgrimage to Santiago de Compostela reached its zenith from the eleventh to the thirteenth centuries and attracted many pilgrims from all over Europe. The pilgrimage, however, changed in character from religious travel to mundane travel in the fourteenth and fifteenth centuries, an age of crisis in feudal society. It was confronted with a more serious crisis in the Reformation of the sixteenth century, when Protestant countries prohibited pilgrimage.

Johann Geiler was a famous priest known as a Catholic reformer. He preached to the common people in Alsace in the fifteenth and sixteenth centuries, urging them to make the pilgrimage to Santiago de Compostela based on his own experience of pilgrimage. According to Johann Geiler, the pilgrimage was an important religious act for good Catholics.

Claude de Bronseval was a monk of the Cistercian Order who traveled to Spain as attendant to an abbot. After visiting Santiago de Compostela as a pilgrim, he said that it was a small city with an old wall and that it was not certain that holy relics were in the custody of Cathedral. His discourse was a proof of the loss of sanctity that had been maintained by Santiago de Compostela for a long time.

The cult to Santo Jacob was exported to Latin America by Spanish Conquistadores. The native Aymara people living near Lake Titicaca in Peru accepted it in the sixteenth and the seventeenth centuries, creating a new religious patron, Tata Santiago, who was the product of syncretizing two religious patrons, the native Illapa and the imported Santo Jacob. The fact that Santo Jacob was called the “son of thunder,” as a symbol of the muskets used by the Spanish Conquistadores to conquer the native peoples, was a factor in the Aymara's acceptance of Santo Jacob.

While pilgrims to Santiago de Compostela decreased more and more in sixteenth century Europe, the cult of Santo Jacob was taken to Latin America and syncretized as Tata Santiago by the native Aymara people.

### 1. はじめに

中世初期にガリシア地方に限定されていたサンティアゴ巡礼は、10世紀半ば以降ピレネー以北に浸透し、11世紀末～13世紀には、ヨーロッパ全域から年間20万人とも50万人ともいわれる巡礼者を集めた。封建制社会の安定と移動のための物的条件の整備、王権や教会、都市当局による巡礼者保護、奇跡や現世利益を期待する民衆信仰、「苦難の長旅」の追体験による内面的純化と靈的救済などが、「西方十字軍」としてのサンティアゴ巡礼に多数の巡礼者を蝟集させた主要因であった。

封建制の危機の時代にあたる中世末期になると、人的移動や情報伝達は容易になる一方で、マリア崇敬に代表される新たな民衆信仰や神秘主義が多くの人々の心を捉え始め、サンティアゴ巡礼にも大きな影響を与えた。14～15世紀のサンティアゴ巡礼は、誘致圏の拡大には成功するものの、「信仰の旅」としての性格を希薄化させ、余暇ないし観光としての側面を強めたのである。「信仰の旅」から「遊行」への転換、要するに「巡礼の世俗化」が顕在化したのであり、それに伴ってバガボンドやアウトローなどの偽巡礼者、代参(富裕者から金銭の支払いを受けて巡礼する職業的巡礼者)、「強制巡礼者」(有罪判決を受けた後、贖罪のための巡礼を命じられた不法行為者)も急増した。

宗教改革期の16世紀には、プロテスタント諸国が巡礼や聖人崇敬を禁止する一方、カトリック諸国内部でも「巡礼の世俗化」への批判が生じ、聖ヤコブから聖母マリアへの民衆信仰の重心の移動も決定的となった。コロンブスのアメリカ「発見」により、聖地サンティアゴのもつ「地の果て」のメタファーが消失したばかりか、16世紀末には、民衆信仰の源泉であった聖ヤコブの遺骸すら「行方不明」になったのである。聖遺物とメタファーの消失、宗教改革を背景に、巡礼者は激減し、サンティアゴ巡礼は深刻な危機に直面した。17～18世紀に入っても、サンティアゴ巡礼者数の長期低落傾向に歯止めはかからず、「科学革命」や啓蒙主義の時代を経た後の19世

紀に底点に達した。サンティアゴ巡礼に関する、以上のような歴史的変遷を踏まえつつ、アメリカ植民地を含めた中近世のサンティアゴ巡礼について、個別具体的に検証したい。

## 2. アルザス地方の民衆説教師ヨハン・ガイラー

アルザス地方からのサンティアゴ巡礼は、11世紀末の聖モランを嚆矢とする。11世紀末以降、多くのアルザス人がパリ、ヴェズレー、ル・ピュイ路を經由し、中世ヨーロッパの三大聖地の一つにして、十二使徒の一人聖ヤコブの遺骸を祀った、スペイン北西部の聖地サンティアゴへ向かった。アルザス地方からのサンティアゴ巡礼は、ストラスブルクやリボーヴィルに聖ヤコブ兄弟団が創設され、巡礼者に宿泊・食事・医療サービスなどを提供した13～14世紀に頂点に達した。しかし15世紀に入ると他の西ヨーロッパ諸国同様、「巡礼の世俗化ないし観光化」が顕著になり、宗教改革期の16世紀にサンティアゴ巡礼者数は大幅に減少した。サヴォナローラ、ジャン・ジェルソン、ピセンテ・フェレルと並ぶ中世末期の代表的民衆説教師の一人で、「カトリック改革者」として知られたヨハン・ガイラーが活躍したのは、この時代のアルザス地方である。

ヨハン・ガイラーは1445年に、アルザス地方の都市シャフハウゼンの公証人の家に生まれた。父の早世により、カイザースベルクの富裕市民であった祖父に育てられ、15歳でフライブルク大学に入学した。パーゼル大学で学位を取得した後、フライブルク大学の神学部講師となったが、教職よりも民衆説教に天賦の才があり、1478年、アルザス地方の中心都市ストラスブルクの常任説教師に転じた。1494年には、マルセイユとアインジーデルンへの巡礼を實踐する一方、神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世の信任を得て、「帝国司祭」に任命され、1510年ストラスブルクで65歳の生涯を閉じた。

ガイラーは生涯に多くの説教集を残しているが、巡礼との関係でとりわけ重要なのは、1494年の『巡礼者とその資質』、1508年の『ドイツ語による説教』である。そこでは自らの巡礼体験も踏まえ、「良き巡礼者」の条件を以下の11点に要約している。

- ・ 出発前に債務を完済し、残された家族を守るためにも、遺言状を作成すべき事
- ・ 革製の頭陀袋、巡礼杖、マント、頭巾、縁なし帽を準備する事
- ・ 靴は足になじんだもの、手袋は上着やマントの余り衣を利用すべき事
- ・ 窃盗防止のため、旅費の一部は衣服に縫いつけておき、財布の隠し場所を内密しておく事
- ・ 巡礼行に持参するのは必要最小限のものに限定すべき事
- ・ 地図と共に、道路わきの十字架やケルン(石塚)を道標として利用すべき事
- ・ 巡礼行で助け合うべき講仲間は慎重に選ぶべき事
- ・ 犬を同伴すべき事
- ・ 巡礼者は日の出から日没まで、着実に歩み、疲れたら休憩すべき事
- ・ 巡礼者は巡礼行の途上において、ダンスや賭け事、祝祭に興ぜざるべき事
- ・ 宿屋でも巡礼者は質素な食事で満足すべき事

民衆説教師でもあったガイラーが、民衆による質素な徒歩巡礼を、巡礼のあるべき姿とみていることは間違いない。巡礼者は講仲間を組織して互いに助け合い、俗事を遠ざけ、霊的救済にのみ関心を向けつつ、聖地サンティアゴへの道を着実に歩むべきなのである。だが現実には「巡礼の世俗化ないし観光化」が表面化し、その誘惑に屈する巡礼者も少なくなかった。そればかりか保護さるべき巡礼者への犯罪行為や、講仲間内部の不法行為すら頻発していたのである。サンティアゴ巡礼を取り巻く、こうした困難な状況があればこそ、ガイラーはアルザス地方の民衆に、「良き巡礼者」像を具体的に提示し、「苦難の長旅」を通じた彼らの回心を期待したのである。

12世紀中葉、ヴェズレーの司祭エムリー・ピコーによって書かれたとされる『サンティアゴ巡礼案内』と比較したとき、興味深いのは地図と犬の同伴への言及である。12世紀中葉のサンティアゴ巡礼者と異なり、15世紀後半～16世紀初頭の巡礼者は地図を携行した。地図の携行が識字率の向上と不可分であることは、いうまでもない。他方、犬の同伴は続発する不法行為からの自衛手段であり、愛犬による内面的癒しを求めていることであろう。巡礼行への愛犬の同伴は、中世末～近世初頭のアルザス地方特有の現象であったのであろうか。

### 3. シトー会士クロード・ド・ブロンスヴァール

シトー会士のクロード・ド・ブロンスヴァールは、宗教改革期の1532-33年に、クレルヴォー修道院長のエドム(エドモン)・ド・ソーリュエの書記官として、スペイン巡察旅行に随行し、『スペイン巡察記』を書き残している。巡察官のクレルヴォー修道院長には、ブロンスヴァールの他に、通訳を兼ねた司祭、コック、馬丁、召使などが付き従い、馬でスペイン、ポルトガル各地のシトー会修道院、主要都市や霊場を巡歴した。主要都市や霊場の中には聖地サンティアゴ、モンセラート修道院も含まれており、巡察とはいえ巡礼としての側面を有した旅であった。ブロンスヴァールが巡察を巡礼と同じperegrinatioと表記していることから、それを窺い知ることができる。

巡察旅行はシトー会総会での決議に従ったもので、その目的は、各修道院におけるシトー会会則の遵守状況や財政状況の査察と、カスティーリャ管区における改革運動の阻止にあった。当時、シトー会カスティーリャ管区会議は、修道院改革運動の一環として、シトー会修道院長の終身制を否定、また修道士の自由な移動を主張して、他の管区会議と対立していた。そればかりか1530年代には、「血の純潔規約」を導入し、4世代を遡って異教徒の「血」の混じったコンベルソ(改宗ユダヤ人)やモリスコ(改宗ムスリム)の入会を拒否したのである。

巡察団は1532年3月にカタルーニャ地方に入り、聖母マリアを祀ったモンセラート修道院を訪れた。モンセラート修道院は、聖地ローマに倣って7つの十字架を配された、急峻な山道を登った頂にあり、スペインなどヨーロッパ全域から多くの巡礼者を集めていた。同修道院で巡察団は修道士に歓待され、クレルヴォー修道院長は主祭壇でミサをあげることができた。カタルーニャ地方からバレンシア地方に南下した巡察団は、モリスコ問題に悩む在地のシトー会修道院を目の当たりにする。モリスコ農民がムスリム海賊と共謀して各地を掠奪しているため、シトー会修道院ですら自衛のため武器を保有せざるをえないのである。

バレンシア地方からカスティーリャ地方に入った巡察団は、1532年6月22日に聖地サンティアゴに到着し、24日まで同地に滞在した。聖地サンティアゴについて、ブロンスヴァールは次のように記している。聖地サンティアゴは古い城壁で囲まれた小さな都市だが、フランス人が多く、フランス語が通じる。その中心ともいえるサンティアゴ教会は、カール大帝が建立した教会で、クレルヴォー修道院長は、主祭壇後ろのフランス人礼拝堂でミサを行うことができた。カール大帝がサンティアゴ教会を建立したとの言説は、神話にすぎないとはいえ、ブロンスヴァールの聖地サンティアゴへの視線は、概して冷ややかである。ブロンスヴァールによれば、聖地サンティアゴの宿屋は臭くて汚い上、サンティアゴ教会に聖ヤコブの遺骸が祀られていることすら確実ではない。同様の記述は、1494年の12月に聖地サンティアゴを訪れた、ドイツ人旅行者ヒエロニムス・ミュンツァーの旅行記においても確認される。聖地サンティアゴの聖性の剥奪であり、マリア信仰の聖地モンセラートとは対照的な記述である。聖ヤコブの遺骸と「地の果て」のメタファーの消失、聖ヤコブから聖母マリアへと民衆信仰の重心が移動したことが、聖地サンティアゴの聖性の剥奪を招来した主要因であった。

### 4. アンデス地方におけるサンティアゴ巡礼

インカ帝国を倒したコンキスタドールのピサロやアルマグロは、征服の過程で中南米植民地に聖ヤコブ崇敬と火縄銃をもたらした。火縄銃を携えたコンキスタドールたちは、キリスト教徒最大の守護聖人たる聖ヤコブの加護を求めながら、インカ帝国の征服を進めたのであり、火縄銃と聖ヤコブ崇敬はインディオ先住民、とりわけインカ族への服属と貢納を強いられた、アンデス高地のアイマラ族の内面的世界に大きな衝撃を与えた。アンデス高地のアイマラ族にとって、火縄銃はインカ族やスペイン人の支配から脱し、かつてのアイマラ王国を再建すると共に、エスニック集団としての自由と自治を回復する物理的手段と映じたのである。アイマラ族は強烈な音と閃光を発する火縄銃を、「雷の子」聖ヤコブと一体化した武器、「物神化された聖ヤコブ」として受容したのであり、そうした中で聖ヤコブ崇敬も、アイマラ族の間に広範に浸透したのであった。

インカ帝国が崩壊した16世紀前半以降ペルー副王領でも、ドミニコ会やフランシスコ会、イエズス会などによりインディオ先住民への教化活動が推進される。アイマラ族をはじめとするインディオ先住民は、表面的な改宗の一方で、16世紀末~17世紀に入っても異教の神々や伝統的な習俗を保持し続けた。1587-88年にアンデス高地の司祭バルトロメ・アルバレスが書いた、フェリーペ2世あて書簡からもその一端を窺い知ることができる。バルトロメ・アルバレスは10年近くアンデス高地で布教活動に携わり、アイマラ語にも習熟した知識人であったが、アイマラ族などのインディオ先住民のカトリック改宗を偽装改宗として断罪し、異端審問所の介入をフェリーペ2世に強く請願している。

異教の神を代表するのが、病気治癒、豊穡、光と雨、戦勝などを司るアイマラ族の主神イリヤーパ神であ

る。やがてイリヤーパ神は聖ヤコブと一体化ないし習合し、タタ・サンティアゴとなる。タタとはアイマラ語で特別に崇敬された守護聖人をさしており、聖ヤコブがアイマラ族の間に広く受容されたことを示している。1625年にイエズス会がチチカカ湖畔に聖ヤコブを祀った教会を建設し、アイマラ族教化の主要な手段としたのも、聖ヤコブ崇敬の浸透(より正確にはイリヤーパ神との習合)なしには、現実的意味をもたなかったであろう。

現在でもチチカカ湖周辺のアンデス高地には、聖ヤコブを祀った、あるいは聖ヤコブの名を冠した約70の教会と集落があり、「サンティアゴ巡礼路」すらつくられている。アンデス高地の巡礼路教会には、ボリビア、ペルー、チリ、エクアドルなどから多数のインディオ巡礼者が訪れており、シンクレティズムに支えられた聖ヤコブ崇敬とサンティアゴ巡礼の拡大、民衆信仰の強い生命力を想起せざるをえない。

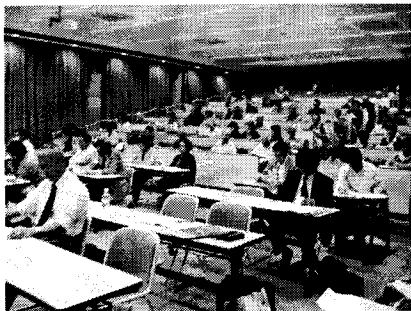
## 5. 結 び

以上、中世末期から近世にかけてのサンティアゴ巡礼の事例を素描してきたが、この時期の特色として巡礼の世俗化ないし観光化、宗教改革やマリア信仰の台頭を背景とした聖地サンティアゴの聖性の剥奪が指摘されなければならない。同時に注目すべきは、中南米植民地への聖ヤコブ崇敬の拡大である。スペイン人コンキスタドールによって持ち込まれた聖ヤコブは、インディオ先住民の主神と習合し、アンデス高地特有のタタ・サンティアゴ崇敬へと変質する。中南米植民地へのヒトやモノの移動と共に、聖人崇敬も「移され」、土着神と融合しながら、新たな聖地が「創出」されたのである。

### 主要参考文献

- V. Almazán, *Alsacia jacobea*, La Coruña, 1994.  
 C. de Bronseval, *Viaje por España :1532-1533*, Madrid, 1991.  
 Xunta de Galicia, *Tata Santiago. El Apóstolo Rayo*, Santiago de Compostela, 2001.  
 B.Álvarez, *De los costumbres y conversión de los indios del Perú*, Madrid, 1998.  
 関 哲行『スペイン巡礼史』講談社現代新書、2006年。

本報告は、平成19～21年度科学研究費補助金（基盤研究（B）一般「四国遍路と世界の巡礼 その歴史的諸相の解明と国際比較」：研究代表 内田九州男、課題番号：09320097）による研究成果の一部である。



第1日目 会場風景 メディアホール



山川廣司氏報告



山代宏道氏報告



関報告代読（西耕生氏）